



後援会活動は 親自身と学生のために

後援会会長 原田新士

2006年の後援会総会で会長に選ばれた原田です。よろしくお願いたします。

これまで後援会が築いてきたものを生かせるように、みなさんとともに努力したいと思います。

子どもの入学以来3年間、後援会に参加させて頂き、大学版PTAのようなものだと思ってきましたが、PTAと共通点があれば異なる点もあります。

保護者が学校（先生）と協力して子どものために何かをするという点では同じですが、肝心の子どもが、実はすでに「子ども」ではありません。

18歳といえば、諸外国では選挙権を有し、立派な成人です。日本でも18歳で働けば、一人前の労働者として責務を負い、子ども扱いはされません。本来、自分のことは自分でする年齢に達しているのが大学生のはずなのです。

しかし、学生にも個人差があって、親の口出しは無用だと自分のことは自分で責任をもってやろうとする学生もいれば、中高生の延長と思えるほどに幼くて、本意ながら親が過保護になってしまうケースもあるというのが実態ではないでしょうか。

子どもがどうであれ、わたしたち保護者は、学生に成り代わって何かをすることは出来ないし、すべきでもありません。学生の自立を促す環境を整備し、条件を作るのが、親の役割でしょう。

後援会の歴史をお聞きすると、当初は、ほとん

ど学校（先生）がお膳立てをして、保護者が自主的に活動するようなことはなかったけれど、その後、毎年の後援会活動の積み重ねの中で、親自身が自立してきたようです。

ささやかな私の体験でも、「後援会活動が楽しい」「役に立った」「卒業しても続けたい」などの声を聞いています。

いま、家庭も職場も忙しくて、仕事以外のことに時間やエネルギーを使うことが困難な状況もあります。

だからこそ、仕事に忙殺されないように、家庭に閉じこもらないように、親が社会に関わっていく大切な窓口の一つに、後援会がなれたらいいのではないかと思います。

高校や大学を卒業すればどこかには正規職員の口があって、就職後も職場で成長し続けることが出来るシステムは優れていると思います。

雇用期間を短期に設定し、給料は安いにこしたことはないという風潮もありますが、すでに十分自立した者も少し幼い者も、働く中でこそ、仕事でも人間関係でも本当の成長が実現すると思うのです。

企業は太っ腹で、学生は真摯で謙虚に、お互い向き合って欲しいと切に願います。最終的には学生本人の問題ですが、私達、親は人生の先輩として何が出来るのかを、探っていければと思います。